

グレアム・グリーン『ジュネーヴのドクター・フィッシャー あるいは爆弾パーティー』 ——物語前半における様々な事物が担う役割——

山村 結花
日本大学大学院総合社会情報研究科

Graham Greene: *Dr Fischer of Geneva or The Bomb Party* —The symbolic roles of diverse things at the first half of the story—

YUKA Yamamura
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Dr Fischer of Geneva or The Bomb Party (1980) was written by Graham Greene (1904-1991) who is called a Catholic novelist, at the age of seventy six. Compared to other novels of his, this story is quite short, but they say that it has shown both Greene's own idea of faith and understanding of the Catholicism with a very unique and ironic way.

This story is narrated by Alfred Jones who is married to a daughter of Doctor Fischer who made a lot of money by inventing tooth paste called Dentophil Bouquet. And the plot of this story consists of a sort of reports of the results by Doctor Fischer's experiments which try to research the greediness of rich people.

Interestingly, one of the features of this story is that despite of the ways of Doctor Fischer who tries to examine the greediness of rich people by very insulting and cruel way, they endure his game to get expensive presents. Also, another feature is that there are many things and metaphors to show character's feeling and own ideas.

Therefore, in this paper, with focusing on especially two scenes in this story, I tried to clarify the roles of things and metaphors to find out the peculiarity and charms of Greene's literature. The one of those scenes is at the first meeting for Jones and Doctor Fischer, and the other is at the party which Jones joined for the first time.

1.はじめに

『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』(*Dr Fischer of Geneva or The Bomb Party*, 1980) は、グレアム・グリーン (Graham Greene, 1904-1991) の晩年の作品であり、彼の他の長編・中編小説と比べると、比較的短い小説である。日本語翻訳のあとがきに、「そのテーマを極度に図式化し、物語的要素を省略して、いわばアレゴリー的に、辛辣痛切なブラック・コメディに仕立てあげている」¹と記されているように、この小説は、信仰心をテ

マとするカトリック小説というよりは、むしろ、グリーン独自のカトリシズムに対するひとつの理解方法とその解釈を劇的アイロニーによって描いたものであると言えよう。

この物語の主人公である五十歳を過ぎたアルフレッド・ジョーンズ (Alfred Jones) は、1940年に起こったロンドンの空爆で左手を失っている。妻を亡くした彼は、スイスのヴヴェーのチョコレート会社で翻訳業に従事し、裕福とは言えないまでも、安定した暮らしを送っている。ある日、彼は、自分と親子

ほど歳の差のある若いアンナ・ルイーゼ (Anna-Luise) と出会い結婚する。彼女の父は、花のフレーバーつきの歯磨きを発明したことで大富豪となったドクター・フィッシャー (Dr Fischer) である。彼は、裕福な者たちを自宅に招いてパーティーを開き、彼の侮辱行為に最後まで耐えた者に、高価な賞品を与えている。

宮本靖介が「この作品は登場人物の性格を軸として特定のテーマを煮詰めていく純文学的作品ではなく、人間の貪欲さの本質を追って手際よく解剖を進める臨床心理学的実験レポートであったと言えよう」²と述べているように、この物語のプロットは、ドクター・フィッシャーのパーティーを実験とした分析結果をまとめるように構成されているという特徴がある。しかしながら、物語全体を通して、登場人物の飲酒行為が描かれているとともに、彼らの装飾品や所有品などの様々な事物、あるいは、様々な事物による比喩が登場人物とともに数多く用いられているのももうひとつの特徴であると言える。

そこで、本論考では、物語前半における、主人公ジョーンズとドクター・フィッシャーとの初対面の場面と、ジョーンズが参加した初回のパーティーの場面において用いられている登場人物が所有する車や、パーティーで用意されている酒・食事、さらには、参加者たちの衣装など、様々な事物とそれらとともに描かれている登場人物たちの行動に着目し、それらの事物に登場人物たちの人物像がいかにかに表されているのかを探究することを目的とする。

2. ドクター・フィッシャーとの初対面に見て取れるジョーンズの人物像

2.1 所有車フィアット (Fiat) ではなく汽車の選択

ジョーンズは、アンナ・ルイーゼとの結婚を彼女の父ドクター・フィッシャーに報告するため、彼の自宅に向かう。

I was just a man called Alfred Jones, earning three thousand francs a month, a man in his fifties, who worked for a chocolate firm. I had left my Fiat with Anna-Luise; I took the train to Geneva and walked from the station to a taxi rank. (p.25)

しかし、ジョーンズは、ドクター・フィッシャーとの面会を目前にし、改めて、自分がチョコレート会社で働く、月給三千フランの五十歳を過ぎた、なんら特別な男ではないことを痛感する。そして、彼が所有する車フィアット (Fiat) 500 をアンナ・ルイーゼとともに自宅に残し、自分一人でドクター・フィッシャーの住むジュネーヴまで汽車を利用する。

さて、この物語で用いられているジョーンズの所有車フィアット 500 は、以前、筆者が『キホーテ神父』 (Monsignor Quixote, 1982) における車の役割を検証した際にとりあげた³フィアット 600 と同じ生産者であるイタリアのフィアット (FIAT) の車である。この会社のウェブサイトには、2 気筒空冷リアエンジンの小型車 (500cc)、モデル「500」を発売し、それは、1975 年まで生産され、総生産台数は 367 万 8 千台を記録したこと、そして、小型車クラスでは、画期的な出来事であったことが記されている。⁴ 当時、イタリアの小型車として人気を博したこの車は、中流階級のエコノミーカーだったのである。

とすれば、この物語において、ジョーンズは、中流階級という自分の社会階級や経済的地位を始めから表出さないように、あえて、所有車フィアットを使用せず、汽車を利用してドクター・フィッシャー宅を訪れたと解することができる。つまり、彼は、アンナ・ルイーゼの父である富豪家ドクター・フィッシャーと自分との間にある格差を痛感しつつ、あえてそれを露わにしない策略として、汽車を利用したのではないか。さらに、この彼の行動には、ジョーンズが自分の年齢とさほど変わらないドクター・フィッシャーとの面会を前にして、自らの自信の無さや引け目を感じている彼の心情と、あえて、自らの弱みや劣りを伏せようとする彼の強かさをも垣間見えるのである。

2.2 ウィスキーの飲酒

ジョーンズは、駅に降り立ち、タクシーをひろってドクター・フィッシャー宅に向かう前、イギリス風にパブと呼ばれる酒場に立ち寄る。

The hours of opening I am glad to say were not

authentically English and I planned to drink up a little courage before I took a taxi.

As the draught beer was almost as expensive as whisky I ordered a whisky. (p.25)

ここで彼は、‘a little courage’「少しの勇気づけ」として、一杯酒を飲もうと考える。そのパブでは、ドラフト・ビールとウイスキーそれぞれの値段にあまり変わりがないと分かった彼は、ウイスキーを注文する。二種類の酒の値段が変わらないという条件のもと、あえて、アルコール度数のより高いウイスキーを注文するこのジョーンズの行動に、彼の緊張感、あるいは、恐怖心を推測できる。なぜなら、ジョーンズのこのウイスキーの飲酒という行為は、ドクター・フィッシャーに対する、彼の緊張と恐怖の大きさを表すだけでなく、自らを奮い立たせることで、愛するアンナ・ルイズの父ドクター・フィッシャーに怯むことなく立ち向かおうとする彼の決意も示されているからである。

I wanted to talk in order to keep my mind off things, so I stood at the bar and tried to engage the landlord in conversation. (p.25)

その後、ジョーンズは、平静さを取り戻すべきと考え、店の主人と話をすることで当面の問題を忘れようとするのであるが、ここには、自分が直面する現実、すなわち、ドクター・フィッシャーとの面会を避けたい彼の心の弱さが見て取れる。

I drank a second whisky and went out. (p.26)

結局、ジョーンズは、一杯に留まることなく、二杯のウイスキーを飲酒した後、タクシーに乗り込む。

こうした彼のウイスキー二杯の飲酒量にもまた、彼の落ち着いたの心情を改めて見ることができると言える。また、この飲酒が、ジョーンズにとって、ドクター・フィッシャーに会うための必要な準備と考えるなら、彼のウイスキー二杯の飲酒行為は、ドクター・フィッシャーの巨額の富や人並み外れた人物像について、読者の想像をさらに膨らませる働き

をしているとも言える。つまり、この働きは、読者に、物語の語り手であるジョーンズを通して、これから出会うドクター・フィッシャーに対する好奇心を喚起させるのである。

3.パーティー初回参加の場面に見て取れるジョーンズの人物像

3.1 所有車フィアット (Fiat) の使用

There were five expensive cars lounging in the drive, two of them with chauffeurs, and I thought that he looked at my little Fiat 500 with disdain. Then he looked at my suit and I could see that his eyebrows went up. ‘What name?’ he asked, though I felt sure that he remembered it well enough. He spoke in English with a bit of a cockney twang. So he had remembered my nationality. (p.50)

ドクター・フィッシャーの豪邸に到着したジョーンズは、庭に五台の高級車が並ぶのを目にし、そのうちの二台はお抱え運転手付きであると気づく。これに対し、ジョーンズの車はフィアット 500 であり、エコノミー小型車である。これらの対照的な車には、ドクター・フィッシャーの招待客たちとジョーンズが、収入、身分ともに対照的であることが示されている。

しかし、先述したように、ジョーンズが初めてこの豪邸に訪問したのは、アンナ・ルイズとの結婚を報告するためであった。その際、彼は自分の車フィアット 500 を自宅に残し、自動車を利用した。とすれば、ジョーンズにとって、二度目となるこの訪問に際し、彼が、自分の車を運転して来ているということは、ドクター・フィッシャー、ならびに、彼の招待客たちに対し、引け目を感じることなく、また、自らを卑下することなく、真っ向から彼らに挑んでいるという彼の意気込みを示しているのではないか。つまり、このジョーンズの行動には、賞品を手に入れることに対し欲念のない自分は、ドクター・フィッシャーの侮辱行為に耐える必要などない、いわば、ドクター・フィッシャーに翻弄されることなどないという自信すら見られるのである。

しかし、ドアを開けた執事は、訪れたジョーンズのスーツ姿を見て驚き、しかも、ジョーンズが誰であるのかを忘れてしまっている。この執事の態度には、普段ドクター・フィッシャーと関わる他の人物たちと比べると、ジョーンズが、人の記憶に残るような目立った人物ではないこと、また、彼が、ドクター・フィッシャーの招待客には匹敵しない人物、すわなち、裕福な者ではないと判断していると考えられる。けれども、執事がコックニー・アクセントの訛りある英語で自分に話したことにジョーンズは気づき、この執事はジョーンズが英国人であることだけは覚えていたのだと思うのである。

3.2 用意されたスープ皿とジョーンズのスーツに描かれた「違和感」

ようやく、執事によって室内に案内されたジョーンズは、ドクター・フィッシャーの‘Toads’（この物語では‘toadies’「おべっかいつかい」という意味で用いられている⁵⁾）に会うことになる。ジョーンズは、この部屋にすでに集まっていた男たちがみな、タキシードを着ており、また、唯一の女性参加者であるモンゴメリー夫人（Mrs Montgomery）が、ロング・ドレスを着ていることに気付く。さらに、ドクター・フィッシャーまでもすでにその場に居ることに気付いたジョーンズは、ドクター・フィッシャーから直々に、室内に入るように告げられる。

ジョーンズが通された部屋には、天井のシャンデリアからの光を受けたクリスタル・ガラスがテーブルに置かれ、高価なスープ皿も用意されている。しかし、彼は、

I wondered a little at seeing them there: it was hardly the season for cold soup. (p.51)

そのスープ皿に対して、今は冬であり、冷たいスープに適した季節ではないのに、なぜこのテーブルに置かれているのかという疑問を抱くとともに違和感を覚える。つまり、彼は、このテーブルセッティングに、これから招待客たちに振る舞われる食事がいささか奇妙なものであることを予期する。実際、その後、このパーティーでは、冷たく味気のないポー

ッリジが食事として配られ、それを食べきった者に賞品が与えられるというルールが、主宰者であるドクター・フィッシャーによって決められるのであるが、この場面において、そのルールはまだ明かされてはいない。

そして、執事だけでなく、‘Toads’ と呼ばれる、モンゴメリー夫人、ミスター・キップス（Mr Kips）、ムッシュー・ベルモント（Monsieur Belmont）、ミスター・リチャード・ディーン（Mr Richard Deane）、クリューガー師団（Divisionnaire Krueger）もまた、ジョーンズのスーツを見て、自分たちの格式を下げたと言わんばかりに、彼に敵意を表わす。そうした彼らの様子は、次のように記されている。

I could feel the fumes of their hostility projected at me like tear-gas. (p.51)

彼らの嫌悪感はまだ言葉としては表されていない。しかし、ジョーンズが感じる敵意に満ちた室内の空気‘the fumes’は、ジョーンズに的を当てた‘like tear-gas’として記されている。つまり、この描写には、死には至らないまでも、目を開けることなどできず、涙が流れ、苦しみ、撃退用ガスのような威力を持った彼らの敵意を感じ、一刻も早くその場を離れたと思うジョーンズの心境を見て取ることができると言えよう。

このように、ジョーンズが初めて参加するパーティーの場面において、高価ではあるが真冬に用意されたコールドスープ用の皿は、また、参加者の衣装がタキシードやドレスである一方、他方、ジョーンズの衣装が単なるスーツであるということは、ジョーンズのみならず執事やその他のパーティー参加者たちに、それぞれ「違和感」や「不釣り合い」という印象を抱かせる役割を担っていると考えられる。とすれば、これらの二つの事物は、いわば、ジョーンズがこのパーティーの趣旨を理解していないだけでなく、このパーティーの意図そのものにそぐわない人物であることを表しているのである。

4.パーティーの場面に見て取れるドクター・フィッシャーと‘Toads’の人物像

4.1 二種の酒と追悼の言葉に表されるドクター・フィッシャーの見解

全員の皿の脇には良質のイヴォルヌ (Yvorne) ⁶ ・ワインが置かれ、片や、ドクター・フィッシャーの脇にはポーランド産のウォッカが置かれている。そして、パーティーの始まりに際し、ドクター・フィッシャーによる追悼の言葉が始まる。

An odd coincidence. I chose the date for that reason. Madame Faverjon died by her own hand. I suppose she could no longer stomach herself – it was difficult enough for me to stomach her, though I had found her at first an interesting study. Of all the people at this table she was the greediest – and that is saying a good deal. She was also the richest of all of you. (pp.55-56)

ドクター・フィッシャーは、二年前に自殺したマダム・ファヴァジョン (Madame Faverjon) の命日に合わせ、この日のパーティーを開いたのだと招待客たちに告げる。また、彼は、初めは自分の研究対象として、彼女に興味をもったが、自分にとっても彼女を許すことは困難だったとし、良い取引という意味で言うと、彼女は誰よりも貪欲、誰よりも裕福だったと指摘するとともに、彼女が、賞品とされるものを自分自身で買うことができるほど裕福であるにもかかわらず、他の者たちのように彼に反抗的な目をみせることもなく、彼の指示に従い賞品を受け取る資格を得続けたとも指摘する。

She was an abominable woman, an unspeakable woman, and yet I had to admit she showed a certain courage at the end. (p.56)

さらに、彼は、彼女が憎悪を引き起こすほど、最悪な女性であったが、最後には勇気を見せたとも述べる。この追悼の言葉から、ドクター・フィッシャーは、彼女の自殺行為を勇気あることとみなしていることが分かる。つまり、自分で自分の命を絶つためには勇気が必要であり、他の者たちにはないその勇気が彼女にはあったと認めているのである。このよ

うに、彼女の自殺を美化する発言により、キリスト教信仰者であるとは言い難いドクター・フィッシャーの人物像が見えてくるのではなかろうか。

非常に興味深いことに、この場面において、ドクター・フィッシャー以外の者たちにはイヴォルヌ・ワインが用意されているのに対し、彼一人だけにはポーランド産のウォッカが用意されている。この用意された酒の違いは、グリーンのカトリック四作品⁷において、ワインがキリスト教と関連するものとともに用いられていることが多いことを考慮すると、この場面にもまた、ドクター・フィッシャーだけがキリスト教信仰者ではないのではないかと考えられるであろう。また、ここで用いられているワインは中立国スイスのワインである。『情事の終わり』(The End of the Affair, 1951) や『キホーテ神父』において用いられているローマ・カトリックを表すイタリア・ワインではないということを考慮すれば、このワインには、彼らがキリスト教信仰者ではあっても、いささか敬虔さに欠けているような印象を与える役割を担っていると言えるであろう。

さて、この場面において、ドクター・フィッシャーの脇に置かれているポーランド産のウォッカは、同じ80年代のグリーン作品である『キホーテ神父』においても用いられている。物語冒頭、キホーテ神父がワインを飲みたいと思うも、自宅のワインをきらし、そこで、元町長のサンチョはポーランド産のウォッカがあると行って神父に勧め、彼らはそれとともに飲みながら楽しく会話を弾ませる。この場面で、サンチョは神父に対し、‘Polish vodka, father. From a Catholic country.’⁸ と述べ、この酒がワインではないが、カトリックの国、ポーランドのウォッカであることを強調する。サンチョは共産主義者である。そして、対照的とも言える彼とキホーテ神父との間における共通点はそれぞれの「思想」、あるいは、「教理」に対する深い信仰心なのである。

これを参考にするならば、この物語におけるドクター・フィッシャーは、キリスト教信仰者であるとは言い難い一面を持つものの、無神論者ではなく、彼自身が掲げる「思想」、あるいは、独自の「教理」に対する信仰というものがあるのではないかと考えられる。そうであるならば、その内容はどのようなも

のなのか。そこで、ドクター・フィッシャーが引き続き述べたムッシュー・グロズリー (Monsieur Groseli) への追悼の言葉に着目してみたい。

He only attended two of our dinners before dying of cancer, so I had no time to study his character. If I had known of the cancer I would never have invited him to join us. I expect my guests to entertain me for a much longer time. (p.57)

このドクター・フィッシャーの言葉から、ムッシュー・グロズリーは癌で亡くなっており、ドクター・フィッシャーは、彼の死をマダム・ファヴァジョンの自殺ほど称えてはいないことが分かる。しかも、長生きして自分を楽しませてくれること、すなわち、自分の侮辱に長く耐え続けることを、彼は望んでいるのである。

こうした、二人の死者に対するドクター・フィッシャーの追悼の言葉により「生」と「死」に対する彼の見解がみえてくる。そして、それらは、以下の三つにまとめることができる。第一に、先述したように、彼は自殺が勇気ある行為であると見なし、自殺を美化している。第二に、病死は侮辱に耐えることから本人を解き放つものであるため、彼は病死に対して嫌悪感を抱いている。そして、第三に、彼にとっては、侮辱を与えることが「生」であり、彼以外の者は侮辱を受け続けることが「生」である。つまり、これらの三点は、彼が掲げる一種の「教理」とみなすことができるのではなかろうか。

また、これら三点から、ドクター・フィッシャーは、自分が常に能動者であり、かつ、侮辱の方法を生み出す創造者である一方、他方、彼以外の者は常に受動者であり、かつ、彼の従者であると、自らみなしているということなのである。

4.2 ワインに手をつけない 'Toads' に表される貪欲と信仰心の関係性

招待客たちは冷たいポーリッジを食べることに必死であり、食事とともに用意されているイヴォルヌ・ワインには一切口をつけようとしていないことをドクター・フィッシャーはジョーンズに次のよう

に指摘する。

'Watch them, Jones. They are so anxious to be finished that they even forget to drink.'

'I don't suppose Yvorne goes well with porridge.'
(p.60)

この彼の指摘に、ジョーンズは、冷たいポーリッジにイヴォルヌ・ワインが合わないからだと返答するが、果たしてそうであろうか。事実、食事をしている者たちは、与えられた冷たいポーリッジをできるだけ早く食べ終えようと必死になるあまり、用意されたワインを一口たりとも口にしない。ドクター・フィッシャーの言葉通り、彼らはワインを飲むことさえ忘れてしまっている。しかも、このワインはスイスのイヴォルヌ産の良質のワインである。とすれば、'Toads' と呼ばれる彼らが、このパーティーにおいて、食事をワインとともに楽しむことを初めから前提とせず、冷たく味気のないポーリッジでも、自分に与えられる分量をすべて食べきること、賞品を手に入れようとしていると言えるであろう。つまり、彼らのこの行動には、彼らのパーティー参加の目的が、賞品を手に入れるためのみであるということが明示されている。

また、既述したように、グリーンのカトリック四作品におけるワインの表象としての役割としてみられる、キリスト教と関連を持たせたワインの用いられ方を考慮するならば、'Toads' と呼ばれる彼らが、信仰に対する敬虔さに欠けていると解釈できる一方、他方、彼らが信仰者であるにもかかわらず、賞品欲しさのあまり、信仰心を失ってしまっていると解することもできるであろう。実際、この後の物語展開において、彼らが、クリスマス・イブの深夜ミサに出席する様子が描かれており、彼らが無神論者ではなく、信仰者であることが明らかにされている。つまり、こうしたワインを飲むことすら忘れてしまっている彼らの行動により、信仰者が信仰心を失ってしまうほどの人間の深い貪欲を示していると考えられるのである。

4.3 冷たいポーリッジを与えるパーティーの意図

なぜ、冷たく味気のないポーリッジを与えるという侮辱的とも言える行為を人々に強いるのかと問いたですジョーンズにドクター・フィッシャーは、

You are not one of us. (p.60)

ジョーンズが自分たちのメンバーに入っていないとしたうえで、次のように話し始める。

'You have a poor man's pride, I see. After all, why shouldn't I tell you. You *are* a sort of son. I want to discover, Jones, if the greed of our rich friends has any limit. If there's a "Thus far and no further." If a day will come when they'll refuse to earn their presents. Their greed certainly isn't limited by pride. You can see that for yourself tonight. Mr Kips, like Herr Krupp, would have sat down happily to eat with Hitler in expectation of favours, whatever was placed before him. The Divisionnaire has spilled porridge down his bib. Give him a clean one, Albert. I think that tonight will mark the end of one experiment. I am playing with another idea.' (p.61)

彼は、ジョーンズが貧乏人のプライドを持っていること、さらに、自分の息子のような者だと認めたいうえで、これは裕福な友人たちが持つ食欲さに限度があるのかを知りたいからだとして述べる。また、ドクター・フィッシャーは、聖書中の言葉「ここまでは来るべし、ここを越ゆべからず、なんじの高浪ここに止まるべし」⁹を、彼らが心得ているか調べたいと思ったが、どうやら、裕福な者のプライドによる食欲の限界というものがないことをジョーンズ自身もその目で確認できたはずだと述べる。そして、ミスター・キップスを「ドイツの鉄鋼王クルップ (Herr Krupp)」に、また、このパーティーを「ヒトラー (Hitler) の会食」に、さらに、このパーティーで得られる賞品を「ナチス政権の支持」にたとえ、クルップは、自分が手に入れたいもののためなら、どんなものでも口にしたり、ミスター・キップスもまた同様であることを指摘する。

こうしたドクター・フィッシャーの発言から、この

パーティーで冷たいポーリッジを与えた彼の意図として以下の二点があげられると言えよう。第一に、聖書の言葉「ここまでは来るべし、ここを越ゆべからず、なんじの高浪ここに止まるべし」が、裕福な者たちに対して当てはまるのかを調べるため、自ら仕組みだ実験を行い、その実験結果によってこの言葉が当てはまらないと立証したうえで、ジョーンズにもその立証を見せつけることで、彼を証人と見なしていることである。そして、これは、ドクター・フィッシャーの実験立証による神への反逆行為と解することができるのである。第二に、ドクター・フィッシャーが、自分自身を「ヒトラー」にたとえていることである。一般的に「ヒトラー」から連想されるものは、独裁、権力、残忍、と考えられる。つまり、自分自身に「ヒトラー」を投影させることで、自らのキャラクターを設定し、それを他の者たちに見せつけていると言える。そして、彼は、自らが企画し主宰する自宅でのパーティーの場をナチス政権下と位置づけし、自らの支配力を誇示しているのである。

次に、ドクター・フィッシャーは、

I'm not greedy for trinkets, Jones. (p.61)

自分自身も裕福な者であるが、自分と彼らの相違点は、「つまらない物」、すなわち、「高価な品々」に対して、彼らのように食欲ではないと述べる。この彼の言葉にジョーンズは、

'Trinkets are harmless enough.' (p.61)

つまらない物には罪や悪意はないと答える。すると、ドクター・フィッシャーは、

I like to think that my greed is a little more like God's.' (p.61)

自分の食欲と神の食欲とは似たようなものであると述べる。この言葉に、ジョーンズは、神が食欲であるのかと問うと、

Oh, don't think for a moment I believe in him any more than I believe in the devil, but I have always found theology an amusing intellectual game. (p.61)

ドクター・フィッシャーは、自分は悪魔を信じる以上に神を信じることはないが、人を楽しませる知的なゲームである神学説を見つけないのだとジョーンズに答える。

このドクター・フィッシャーの言葉から理解できることは、まず、彼が悪魔の存在を信じるキリスト教信者であることを自認しているということである。また、彼がこの場面において用いている‘intellectual game’という語にも着目したい。‘intellectual’は、「1.知性の、知力[知能]に関する、理論的な、理詰めの」という意味と、「2.聡明な、知的な」という意味がある。¹⁰ 次に、‘game’は、試合、競技、ルールのある遊び、ゲーム、娯楽など、一般的に広く知られている意味のほかに、(追求・攻撃の)目標、対象という意味もある。¹¹ つまり、キリスト教信者であるドクター・フィッシャーが、自ら見つけ出したい神学的見解とは、「人を明るくさせる要素を備えると同時に、理論的かつ聡明で、ルールある競技であるとともに目標となるもの」なのである。

4.4 リチャード・ディーンが所有するメルセデス・ベンツのスポーツカー

Compared with the Toads I must admit your father did keep a kind of dignity – a devilish dignity. (p.63)

ジョーンズは、初めて参加したパーティーで見たドクター・フィッシャーの様子を、「悪魔の威厳があった」とアンナ・ルイーゼに話す。そして、ドクター・フィッシャー自らが、贈り物を‘the stakes’ (p.63)と発言したことで、それがどういう意味であるのかと問いたすアンナ・ルイーゼにジョーンズは、次のように答える。

'I suppose he meant his bet on their greed against their humiliation.' (p.63)

彼は、ドクター・フィッシャーが、金持ちたちの侮辱に対する彼らの貪欲さを勝負に賭けているのだと思うと言う。また、このパーティーで、十八金の時計を手に入れることができず、代わりに豚皮の写真枠を得たリチャード・ディーンが、その後、メルセデス・ベンツのスポーツカーに乗り込んだのを見たジョーンズは、今後、リチャード・ディーンがパーティーには戻ってこないだろうと推測する。しかし、これに反し、アンナ・ルイーゼは、彼が戻ってくると確信している。

'That car was a present too. But you – you'll never go back, will you?' (p.64)

そして、その理由は、彼の車もドクター・フィッシャーからの贈り物であるからだと彼女は言う。では、この彼女の言葉は、何を意味しているのであろうか。既述したように、ジョーンズはドクター・フィッシャーの豪邸の庭に並べられた五台の車、すなわち、ドクター・フィッシャーのパーティーに招待された者たちのすべての車が高級車であると認識している。そして、そのうちの一台がメルセデス・ベンツのスポーツカーであることを考慮すると、おそらく、この物語において、メルセデス・ベンツは、高級車を所有できる人物の富とその地位の象徴として用いられているということであろう。また、リチャード・ディーンが得た賞品が、メルセデス・ベンツの中でもスポーツカーであることから、スピードの速さと強度に示されるその高機能性、そして、美しい外観、さらに、より高額なイメージをもつこの贈り物が‘the stakes’なのであろう。そう考えるならば、この高級車であるメルセデス・ベンツのスポーツカーを手に入れるためのリチャード・ディーンの貪欲さに比例するドクター・フィッシャーによる侮辱行為とは、いったいどれほど惨めなものなのかと、読み手の想像を膨らませる役割をこの車は担っているのである。

つまり、このアンナ・ルイーゼの言葉は、このような高級車を取得できるほどの惨めな侮辱を受けても、まだなお、リチャード・ディーンはドクター・フィ

ッシャーのパーティーに参加し続けていることから、今回のパーティーにおいて侮辱に耐えたにもかかわらず、十八金の時計を取得できなかったことを理由に、再びパーティーに戻ってこないはずなどない、ということの意味している。すなわち、それだけ、リチャード・ディーンの食欲が深いことを意味しているのである。また、それと同時に、彼女は、ジョーンズが、リチャード・ディーンのような欲の深い人間ではないと見ているのである。

5.おわりに

本論考は、『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』の主人公であるジョーンズとドクター・フィッシャーとの初対面の場面と、ジョーンズが参加した初回のパーティーの場面において用いられている車、酒や食事、参加者の衣装など様々な事物とそれらとともに描かれている登場人物たちの行動に着目し、それらの事物に登場人物たちの人物像がいかにか表されているのかを探究することを目的として検証した。その結果、この物語において登場人物が所有する車には、①登場人物の社会階級や地位を表す、②使用するか否かにより登場人物の心情を表す、③それ自体が持つイメージとその入手方法によって、その車に関係する人物の食欲の深さと侮辱行為の惨めさを読者に想像させるという三つの役割があると言える。なかでも、①は、筆者による『キホーテ神父』におけるフィアットとメルセデス・ベンツの対比による検証においてもみられた結果¹²であるが、②、③は、『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』における、特有の役割であると言える。

そして、この物語における「酒」の用いられ方にはグリーンのカトリック四作品と共通して、登場人物の心情を表す役割がある。また、同じ80年代の作品である『キホーテ神父』での用いられ方を参考にするならば、登場人物たちとともに用いられる酒の相違により、彼らの信仰における類似性と相違性を間接的に示すとともに、登場人物独自の「教理」を垣間見せている。さらに、グリーンのカトリック四作品において、キリスト教と関わりを持たせ、表象としてワインが用いられていることを考慮するならば、

この物語におけるワインに担わされた特異な役割は、信仰者でありながら、賞品目当ての食欲の深さゆえに、目の前に用意されているワインを飲むことさえ忘れてしまった者たちの行動を通して、深い食欲により信仰心を失ってしまう人間性を示している。

また、冷たいポーリッジを、あえて高級ワインとともに用いながら冷たいポーリッジのみを食べ続ける人物たちの姿を通して、人間の食欲さが強調されている。さらに、パーティーの場面におけるコールドスープ用の皿とジョーンズのスーツという小道具に「違和感」を与える役割を担わせることで、ジョーンズがパーティーの趣旨、ならびに、他の招待客にそぐわない人物であることを示しながら、他の招待客に描かれた食欲さを際立たせている。

そして、パーティーの場面におけるこれらの事物の用いられ方は、あえて故意に仕組んだ仕掛けを顕著に示していると言える。つまり、パーティーの場面におけるこれらの事物の集まりが、本作品がまるで、ドクター・フィッシャーの実験レポートであると言われる特徴の構成要素なのである。

これらの検証結果から、グリーンは、物語において、様々な事物に、ときには、他作品と共通性を持たせ、またときには、他作品には用いられていない特異性を持たせて読者に物語をより面白くさせる役割を担わせているのである。こうした物語における様々な事物の用いられ方とその役割は、グリーン文学に関する先行研究において、これまで注目されることのなかった新たな特質の一つであるとみなして差し支えないであろう。

<使用テキスト>

Greene, Graham. *Dr Fischer of Geneva or The Bomb Party*. London: VINTAGE BOOKS, 1999.

グレアム・グリーン著、宇野利泰訳『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』、早川書房、1981年。

¹ グレアム・グリーン著、宇野利泰訳「あとがき」『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』、早川書房、1981年、p.205 参照。

² 宮本靖介著「ジュネーヴのドクター・フィッシャー」『グレアム・グリーンの小説——宗教と政治のはざまの文学——』、音羽書房鶴見書店、2004年、p.184 参照。

³ 「グレアム・グリーン『キホーテ神父』——ワインと車が担う物語の中での役割——」、日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 14 号、2013 年 7 月、参照。

⁴ 「フィアットの歴史」[FIAT オフィシャルホームページ](http://www.fiat-auto.co.jp/aboutfiat_history2.html). Fiat Chrysler Japan. 22 October 2012. <http://www.fiat-auto.co.jp/aboutfiat_history2.html>.

⁵ Greene, Graham. *Dr Fischer of Geneva or The Bomb Party*. London: VINTAGE BOOKS, 1999. p.10.

グレアム・グリーン著、宇野利泰訳『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』、早川書房、1981年、pp.8-9。

⁶ "Yvorne Wine." [wine searcher](http://www.wine-searcher.com/regions-yvorne). Wine-Searcher.com. 18 May 2013.

<<http://www.wine-searcher.com/regions-yvorne>>.

⁷ 『ブライトン・ロック』(*Brighton Rock*, 1938)、『力と栄光』(*The Power and the Glory*, 1940)、『事件の核心』(*The Heart of the Matter*, 1948)、『情事の終り』(*The End of the Affair*, 1951) がグリーンのカトリック四作品と称されている。

⁸ Greene, Graham. *Monsignor Quixote*. London: PENGUIN BOOKS, 2008, p.18.

⁹ グレアム・グリーン著、宇野利泰訳『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』、早川書房、1981年、p.34 参照。

¹⁰ ‘intellectual’ ジーニアス英和辞典第 4 版（電子辞典）、2007 年。

¹¹ ‘game’ ジーニアス英和辞典第 4 版（電子辞典）、2007 年。

¹² 「グレアム・グリーン『キホーテ神父』——ワインと車が担う物語の中での役割——」、日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 14 号、2013 年 7 月、参照。

(Received:September 30,2013)

(Issued in internet Edition:November 1,2013)